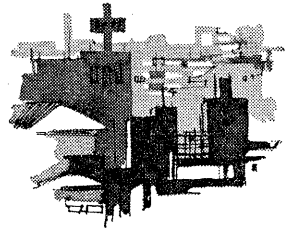


ユートピア



本田 和子

アメリカに留学している若い児童学研究者、江波諄子さんから、こんなお便りをいただきました。

「教育のみならず、この国にいると人類は退廃の時期に来たのかしらと大げさに考えてしまいます。何世紀の間とても生産的できて、しかもその生産性を人間が支配してきましたが、いつの間にか機械が速くまわりすぎ、人間がその後を追っているようになってしまったのではなにかと思えてしまうのです。

幾人かの優秀な人はその現状に気づき警告しますが、どうしてよいかは誰にもわからない、みんながみんなもがいている、この富んだ社会の中で…。

全てがコンピューター化され、便利すぎるようになりましたら人間は一体どうなるのでしょうか。でも実際、社会は急速にそうなるように近づいているのです。

私は二十一世紀の教育を考えなくてはならない人間のひとりですが、この点では頑固なおじいちゃまが古いしきたりを一人で守っている姿を自分の中にみます。

一体人間はどこまで物（操作できるという意味の）になり得るでしょうか。

文明の進歩は人間を物へ、物質へと押しこめているようです。何百年もの間かかっていたひとつの時代から次の時代への変化が、今や数年あるいは二、三年の間にやってくるように変化の加速度が加わっているのですから。

アメリカの幼児教育は一体どうなっているのでしょうか。子どもたちは研究という名の下で細かく細かくお料理されています。おとなたちは自分のお料理に満足しておりますが、一体子どもはよくなっているのでしょうか。

私はもう旧式なのでしょうか。でもナーセリースクールの子どもたちと触れ合

って、子どもたちを愛し気持の通じ合う、とても幸せで人間的な経験を持つていると思うのですが……。

今や、子どもをほんの一面からこまごまみる人は増えましたが、姿全体をみられる人は本当に少なくなっているように思えてしまいます。

アメリカという国は大きすぎてどうしようもない国です。みんながいっしょけんめい動いているのですが……。

日本の教育はアメリカの後を追っているのでしょうか。アメリカのように進んでも、同じにならないように願っておりません。教育の場はある意味で病んでいるのです。こんなにもきれいな青い空と芝生と立派な建物があるのに……」

子どもを「ひとりの人間」としてより生き生きと生活させることを願って、そのために学び得る多くのものを吸収しよ

うと、海を渡っていった若い学徒は、アメリカのこんな姿に感慨ひとしおだったでしょう。

子どもの生活はバラバラにされ、その細かな部分が詳細に研究される、厳密な科学的手続きを経て、使い得る限りの器械を駆使して。あたかも細胞の一片を電子顕微鏡でのぞくかのよう。

そして、それらの研究成果が山積されていく時、もっと悲しくもつと恐ろしいことが起こってくるのです。即ち、それらの詳細に研究された細片をよせ集め、はり合わせるならば、それで教育が進歩するかのような錯覚に、教育界が陥ってしまうのです。目の前に生きて動いているいきいきした子どもの生活を忘れて。

ましてや教育界全体が、子どもたちの生活全体と取り組むことを止めて、それを細かな片に分解することを始めるとしたら、子どもの不幸はここにきわま

る、とすらいつてよいのではないでしょうか。

ゴッホの絵を仔細に検討し分析して、その使われた絵の具の質や割り合いが、あるいは絵筆が画布の上を何回往き来したかなどが、具体的にとらえられたとします。ところで、それらが判れば、すべての人がゴッホと同じ作品を描き得るとは、誰も考えないことでしょう。ゴッホというかけがえのない個性が、南フランスのあの風物と出会い、めくるめく陽光と茂り合う樹々とふれ合って激しく燃焼した時、はじめてこれらの作品が生まれ出たのですから。

人の教育は芸術ではないでしょうか。ましてや、あのいきいきしさと光に溢れた幼児たちと、保育者という一つの個性が出会う幼児教育は、まさに芸術そのものではないでしょうか。